

子どもの課題を学力と意識の両面から 捉え、学年体制で学級づくり

東京都 品川区立小中一貫校 荏原平塚学園

2010年に開校した品川区立小中一貫校 荏原平塚学園は、開校以来、学力向上のベースとして、学習に向かう姿勢や生活態度の育成に努めてきた。子どもの「意識」を高めるために、さまざまな取り組みを取り入れると共に、それを保護者と共有して積極的な協力を求めている点に注目したい。

取り組みのねらい

- 学習に向かう姿勢や生活態度の個人差を解消し、全ての子どもが落ち着いて学べるようにする
- 保護者との連携を強化して、学習や生活に対する意識を高める

取り組みの内容

- 「総合学力調査」を活用して子どもの実態を客観的に把握し、指導の方針を検討した
- 意図的に複数の教師が子どもにかかわる指導により、学年全体で子どもを育てる
- 三者面談中に子どもに自己評価を語らせ、保護者にも積極的な協力を求める

取り組みの成果

- 落ち着いた学校生活を送るようになった
- 学習に対する姿勢が向上し、学力向上にもつながりつつある
- 学校と保護者が同じ目線で子どもを育てる雰囲気生まれた

取り組みのねらい 課題の背景にある要因を分析し 新しい学校づくりを推進

品川区立小中一貫校 荏原平塚学園は、小学校1校と中学校1校が統合して、2010年4月に開校した。校区は商店や住宅、町工場などが混在する地域で、古くからある商店街には下町の雰囲気がある。

子どもは元気いっぱい人懐っこいが、以前は落ち着いて学習に向かえない姿が見られたという。小泉和博校長は次のように話す。

「学習姿勢や生活態度に個人差が大きいことが課題でした。先生方の多くは日々の指導

S c h o o l D a t a

◎2010(平成22)年に品川区立平塚小学校・荏原平塚中学校が統合して開校した施設一体型の小中一貫校。異学年交流、中学校教員による5、6年生での授業など一貫校ならではの教育に力を注ぐ。



校長 小泉和博先生

児童・生徒数 540人 学級数(1~9学年) 19学級

所在地 〒142-0051 東京都品川区平塚3-16-26

TEL 03-3782-7770

URL <http://school.cts.ne.jp/~ebahi-g/>

公開報告会 2015年1月21日(水) 予定

*プロフィールは2014年3月時点のものです

学びに向かう土台を築く学級づくり

で手一杯で、学級の力を高める指導まで行き届かなかったことが一因だったと思います」
背景には、家庭における教育力の差の拡大や、新設校のため、地域と十分な連携が出来ていなかったこともあると捉えている。

「周囲に子育ての助言をしてくれる人がおらず、子どもにどう接すればよいのか分からない保護者への対応や啓発を、学校が行う必要があると感じました」（小泉校長）

そうした状況を踏まえ、学校としての一体感を育み、家庭や地域との連携を強めることで、子どもが落ち着いて学べる環境をつくることを目指してきた。

取り組みの内容

「学力」と「意識」の2つの軸で

実態を捉えて対策を検討

学校づくりに当たって、子どもの実態を客観的に捉えるために、12年4月、ベネッセコーポレーションの「総合学力調査」を実施。その分析結果を基に、学校や学級における指導の方針を検討した。二宮副校長は次のように語る。

「子どもの課題の特定については、教師の勘のようなものがあり、大筋では大きく外れません。その教師の勘をデータとして客観視することによって、課題はより明確になりますし、教師間で共有しやすくなります。保護

者に対しても、データを示しながら説明すると、説得力が増すという良さもありました」

調査結果は、二宮副校長が学年・学級ごとに分析し、特に気になる課題を抜き出して教師に提示。担任の学年だけでなく、全校の課題として捉えてほしいと考え、課題は1〜9学年のものを全校の教師に示した。

「全てのデータを共有しましたが、全てについて対策を講じるのは教師の負担が大き過ぎます。そこで、特に優先される課題を絞り、対策を重点的に行いました」（二宮副校長）

課題を抽出する時、特に着目したのが学力と意識（学級力・家庭学習力・学びの基礎力・社会的実践力）との関係だ（図1）。2つの関係の強さがデータとして表れたため、まず意識を高めて学びの土台を築いた上で、学力の向上につなげる方針を固めた。

図1 学年別 学力が高い児童・生徒の意識

- 2年生…家族は自分のことを気に掛けてくれる
- 3年生…一人ひとりの命や心を大切にしている
- 4年生…学級目標に力を合わせて取り組んでいる
- 5年生…家で勉強していて分からないときに教えてくれる人がある
- 6年生…分からないことはそのままにせず、分かるまで努力している
- 7年生…ふだんから「ふしぎだな」「なぜだろう」と感じることもある
- 8年生…自分と違う意見も尊重している
- 9年生…テストで間違えた問題はもう一度やり直している

*同校の資料を基に編集部で作成



品川区立小中一貫校 荏原平塚学園校長
小泉和博 こいずみ かずひろ
「先生方の発想やアイデアが出しやすい環境をつくり、チームとして学校を活性化していく」



品川区立小中一貫校 荏原平塚学園副校長
二宮 淳 にのみや・じゅん
「どのような社会にも通用する力を育てる。何があっても子どもを見捨てない」



品川区立小中一貫校 荏原平塚学園
倉次里絵 くらなみ・りえ
主幹教諭。4学年担任。「なりたいたい自分を思い描かせ、夢を実現させる」



品川区立小中一貫校 荏原平塚学園
西村柳一郎 にしむら・りゅういちろう
主任教諭。4学年担任。「教育の最終目標である自己実現をさせるために自尊心を育てる」



品川区立小中一貫校 荏原平塚学園
伊藤孝仁 いたとう・たかひと
主任教諭。4学年担任。「一人は皆のために、皆は一人のために」という思いで周囲にかかわる子どもを育てる」

取り組みを考える上では、子どもを「学力」と「意識」の2つの軸で構成した4つのゾーンで把握した（P.16図2）。初めにDゾーンの子どもをCゾーンへと育て、その後、Aゾーンを目指すという方針を立てた。塾に通う子どもなどの中によく見られたBゾーンの子どもも、人間性が十分に育たなければ、将来的

にいずれ挫折してしまうと考え、Aゾーンへと育てる指導の必要性を保護者に伝えた。

品川区立の小・中学校には、自己管理や人間関係形成、自治的活動などの資質や能力を育てる「市民科」という科目がある。意識を高めるために、調査結果で課題があった項目について市民科で重点的に指導した。

また、学校全体で生活規律の整備、あいさつ運動の実施、縦割り活動の充実などに取り組みほか、13年度からはボランティア活動を積極的に取り入れ、「心を耕す」ことを目指す。

守らせるルールを5つに絞り 学年全体で指導を徹底させる

学年や学級での具体的な指導は、それぞれの実態に合わせて検討した。13年度の4年生の取り組みを見てみよう。

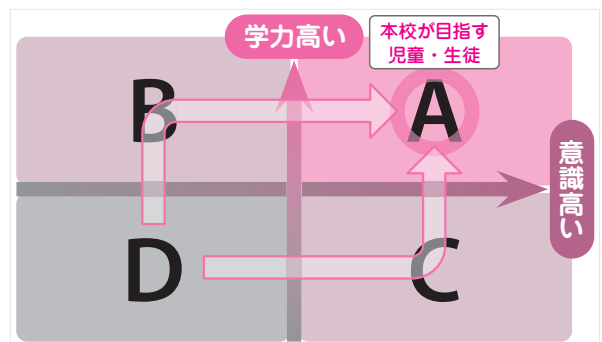
4学年主任の西村柳一郎先生は次のように説明する。

「調査結果では、学習に向かう姿勢や生活態度が十分に育っていないという課題が裏付けられました。学年が一体となり、各学級の力を高め、一人ひとりの子どもを伸ばすことを目指しました」

取り組みの1つが、学校としてのルールの明確化だ。教職員で話し合い、「返事」「時間」「身だしなみ」「あいさつ」「言葉遣い」に関する指導を徹底することを決めた。

「学校生活のルールは非常に多岐にわたり

図2 「学力」と「意識」の関係



家庭と連携して児童・生徒の意識を高め、学力向上に結び付ける

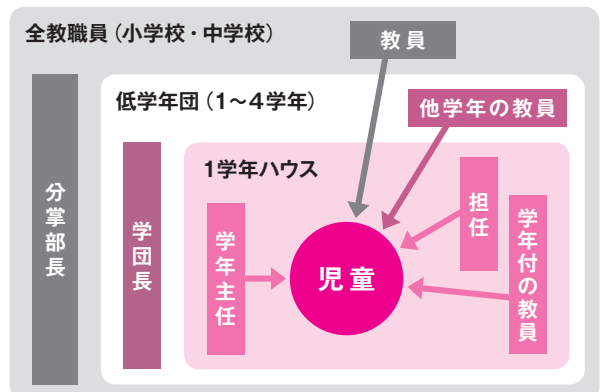
子どもたちが、学力が高く、意識も高い「Aゾーン」を目指すよう、教育活動を行うことが、学校の目標だ
*同校の資料を基に編集部で作成

ます。その全てを守らせるのは現実的ではないと考え、特に重要な5つに絞りました。そして、『これだけは絶対に守ること』と、強い信念で繰り返し伝えました」(西村先生)

学園では「荏平(えびら)ハウス方式」として、意図的に複数の教師で子どもにかかわる体制を取っている(図3)。学年全体で各学級を育てると意識の下、3人の担任が3学級を回り、それぞれ1つのテーマで市民科の授業を行う試みもした。4学年担任の伊藤孝仁先生は、次のように子どもの様子を話す。

「別の学級の教師の個性や発問により、子どもは普段とは違う反応や発言をしていました。また、担任の先生だけではなく、学年の先生に見守られているという意識も生まれた

図3 「荏平(えびら)ハウス方式」



「学年を1つの温かいハウス」として、意図的に複数の教員で児童にかかわり、学級の安定に努める
*同校の資料を基に編集部で作成

と思います」

4年生の調査結果では、子どもが学級目標を知っていることと学力との間に相関関係があることが示されたため、倉次里絵先生はこの点に着目し、学級目標の定着を図った。

「一人ひとりが学級の大切なメンバーだという帰属意識を高めるため、皆で話し合っって学級目標を決めました。『1~3年生のあこがれになること』『かっこいい5年生になること』が子どもから挙がり、そこへ私の願いを加えて、『自分や人の命、体、心、時間を大切にする』の3つとしました。それを教室に掲示し、『皆で達成しよう』という雰囲気づくりを努めるうちに定着が進み、自分の目標として意識できるようになりました」

学びに向かう土台を築く学級づくり

倉次先生は、家庭の教育力に差がある状況にも目を向け、その差を埋める取り組みとして、辞書を使うことの良さを授業で積極的に伝えた。すると、一部の子どもが自主的に調べて発言するようになり、また、その子どもを取り組みを褒めることで、辞書活用が学級に広がっていった。

学年全体の取り組みとして、「評価」の方法を工夫し、統一したことにも注目したい。

「学年や学級として学習や生活の面で到達させたいことは、『絶対評価』の観点で目標の到達を目指しました。一方、一人ひとりに対しては、『前よりも良くなったね。ここを頑張れば目標に近づくよ』などと『個人内評価』の観点から声を掛けることで、自尊心を高めていきました」（西村先生）

子どもの自己評価と課題を三者面談で自分の言葉で語らせる

意識の向上に向けた数々の取り組みの効果を最大にするためには家庭の協力が不可欠と考え、保護者に連携を求めた。

「学校の指導だけで子どもの力を伸ばすことには限界があります。教師は力を尽くした上で、保護者に協力を求めていく姿勢が必要です」（倉次先生）

4年生では、年度初めの保護者会で、「1年間でこんな子どもに育てる」というメッセージを示し、その後の保護者会では学期

ごとに成果を伝えた。更に、7月の保護者面談では、学校と保護者の目線を合わせるために、保護者の思いを尋ねた。

「保護者に『教育で一番大切にしていることは何か』『それがどのような子どもの姿で見られることを期待するか』を聞き、学校に望んでいることを捉えました」（西村先生）

12月の三者面談では、生活や学習について子ども自身が自己評価をして、教師と保護者の前で発表した。子ども自身の言葉で伝えることで、保護者により実感を持ってもらうのがねらいだ。課題については、保護者と教師の前で「これから頑張ること」として約束した。子どもには、自身の内面を深く見つめさせ、保護者には、子どもの課題をその子の言葉で知らせるといふ点で、非常に難しい取り組みだったという。

「3学期に入ってから、『約束』を改めて紙に書かせるなどの指導をすることで、徐々に自分の課題として意識するようになり、具体的な行動が変化していきました」（倉次先生）

取り組みの成果

まるで別の学級のように 学習に意欲的に取り組む子どもたち

一連の取り組みは、子どもたちにどのような影響を及ぼしたのだろうか。

「1年間の取り組みで、4年生の姿はまる

で別学級かのように変わりました。課題に対して真剣に取り組むようになりましたし、出来た子どもが周りの子どもにアドバイスをする姿も日常的になりました」（伊藤先生）

以前は私語だった授業中のざわつきが、今では教え合うことによるものへと質が変わったことに、教師は喜んでいいる。

テストに対する姿勢からも、意識の変化が見て取れる。以前は「テストがある」と言っても内容に無関心だったが、今では「えー！」と驚きの声上がる。採点した答案を返すと、熱心に見直す姿が見られるようになった。

「子どもの姿から、『学力につながっている』と自信を持って言えます。次回の総合学力調査の結果が楽しみです」（倉次先生）

今後は家庭との連携により、自学をより強く促していく方針だ。

「学校教育で最も大切なのは授業です。教師は指導力を上げる必要がありますが、同時に授業だけでは限界があることも認識し、家庭で自学に向かわせる方策を考えたいと思います」（西村先生）

14年度も4月に総合学力調査を行い、2学期末には意識調査のみ2回目を実施する。

「学力と意識の双方の変化を正しく捉え、次の目標である学力向上につなげていきます。現時点で意識はかなり高まっていますので、15年度からは学力に重点をシフトする方針です」（小泉校長）